

私、紀要の味方です

—研究・イノベーション(学会)への貢献に向けて—

研究・イノベーション学会第35回年次学術大会
大会実行委員会企画セッション「紀要の魅力と大学の役割」
(2020年10月31日)

近畿大学経営学部教授 高橋 愛典

1. はじめにちょっと自己紹介

- 学部は経済学(交通経済学のゼミ)
- 大学院は商学(交通論・交通経済学専攻)
- 現任校の主要担当科目はロジスティクス論(物流)
- 学内紀要とのかかわり
 1. 大学院生時代の後半は助手として勤務・・・
紀要『早稲田商学』『文化論集』の編集担当
 2. 現任校で数年間、紀要『商経学叢』を編集・・・
助手はおらず職員さんが手伝ってくれるわけでも
 3. 他学部(1回)・他大学(3回)の紀要に投稿の経験
- 学会誌の編集・査読も経験・・・比較しつつ考える

2.「味方」という「見方」

- 村松友視『私、プロレスの味方です』（村松[1980]）
- 「プロレスについてしゃべろうとするとき、のどのあたりに何かイガラッポイものを感じるのは、きのうやきょうのことではない。「プロレス」とこっちが発音したときに相手が作る表情、これがイガラッポサを生んでくれるのだ。平たく言えば、プロレスを馬鹿にし、軽んじている顔つきなのです。」「まあ、10人に話しかければ7人までは同じような表情をする。」
- 「プロレス」を他の言葉に置き換えると...？
 1. ジャズがこう語られた時代があった（山下洋輔）
 2. 徹頭徹尾、物の見方を語っている（伊丹十三）

3. 本報告の目的

- 文系学問も制度化(institutionalization)と英文学術誌・国際学会志向・・・紀要が一層「イガラッポイ」存在になっている今、メリットは残っているか？
- 紀要の(学会誌や英文学術誌と比べた際の)メリットを伸長させデメリットを克服する方策を検討することで、研究・イノベーションへの貢献を目指す・・・メリットがデメリットに転じる条件も検討
- 図書館情報学の立場(竹内[2012])と重なるが、より「実務家」(執筆者・編集者・読者)としての意見
- 議論の前提は現任校の『商経学叢』(教員は査読なし)・・・大学・学部・分野などにより前提に違い

4. 紀要のメリット ① ②

① 速報性・・・×切・投稿から発刊までのリードタイム

- 査読誌なら最低でも半年・・・査読なしの紀要なら3～4か月が標準的なリードタイムか→年3～4回刊
- 逆にいうと、リードタイム半年以上・発刊年1回(以下)ならば、紀要の意味自体が薄れる・・・ローカル列車(車両も運行間隔もなるべく短く)と同じ！？

② 長く書ける ←紙幅の制約がユルい、連載も可

- 学会誌などに向けて短くまとめてしまうと、削った部分を忘れてしまう・・・サーベイ論文や書評など、自由に書いて活字・記録に残す場として重要
- 逆にいうと、紙幅の制限が厳しい紀要の意味は？

5. 紀要のメリット ③ ④

- ③ 印刷がキレイ・・・図表など書籍より美麗な場合も
 - カメラレディは「財政とリードタイム要求が厳しい学会誌向け」と思いたい・・・紀要なら、印刷業者が版下を作って著者が校正する機会は欲しい
- ④ オープンアクセス・・・学会誌より紀要で進展
 - 想定外・想定以上の読者獲得・・・ダウンロード数がわかるだけでなくアクセス解析までできれば...?
 - とはいえ冊子体と抜刷の廃止は寂しい・・・目次(論文のテーマと並び)が、教員組織が持つ研究のスタンスを表す(いかに個人商店・商店街組合でも)

6. 紀要のメリット ⑤ ⑥

- ⑤ 退任記念論文集（追悼論文集を含む）の企画
 - 以前は存在自体が「ウェットで封建的…」と思っていたが、企画や執筆のモチベーションになることも
 - 理系にはない風習であろうが、依頼すると協力的
- ⑥ 〆切が人をつくる・・・自らを律する機会の一つ
 - 著書や博士論文を1章ずつ書く・・・古典的な使い方、「二重投稿だ！」と安易に指弾すべきではない
 - ワーキングペーパー風に使う・・・「挑戦的・萌芽的研究」の促進、「外堀を埋める」過程を長めに書く、ワーキングペーパー（別途ある制度）との違いは？

7. デメリットとその克服 ① ②

- ① 紀要は業績稼ぎに使われ剽窃が多く発生
 - オープンアクセスが進んでいるので、アカデミーの外の読者からも「刺され」かねない・・・不祥事は、学会誌なら編集委員会の責任になるが、紀要では筆者の責任が問われ大学を追われかねない...
 - 「昇任論文」を紀要に投稿する規定は要るか？
- ② 自然科学系や経済学では活用されているか？
 - 理系学部の紀要の意味は？（東大工学部は廃刊）
 - 経済学の「制度化」（佐和[1982]）・・・商経学部が経営（『商経学叢』）と経済（『生駒経済論叢』）に学部を分離した後の厚さの違い（定量分析可能?）

8. デメリットとその克服 ③

③ そもそも、日本(語)で書いてどうするの？

- 紀要に英語で書かれている論文は、「英文学術誌でリジェクトされた論文」なのか？
- 日本国内で役に立つことが大事だが(広範な読者の獲得)、海外への発信も考える必要・・・紀要や国内学会誌に掲載された論文の「翻訳」をどう考えるか？(そこでも二重投稿への指弾があると厄介)
- 海外には紀要が発祥と思しき伝統的学術誌があるが、現在は大学の名前を残しているだけ？・・・紀要は日本だけのガラパゴス的存在か？
- →ヨーロッパのUniversity Journals(設楽ほか[2019])

9. おわりに

- 21世紀に入ってから創刊された紀要で、冒頭で弁明がなされる例・・・伊藤ほか[2001]、重松[2007]
- 大学設置基準には、1999(?)～2011年度に以下の規定があった(第2条の2)・・・「大学は、当該大学における教育研究活動等の状況について、刊行物への掲載その他広く周知を図ることができる方法によつて、積極的に情報を提供するものとする。」
- これが紀要の根拠?・・・教育情報については、インターネット活用を前提に公開が促進されている
- 紀要を、研究活動の情報提供の場として活用する余地・・・教員組織が持つ研究のスタンスがわかる

参考文献

- 伊丹十三[1982]「解説」 村松友視『当然、プロレスの味方です』文庫版(角川書店)所収、村松[1994]pp.447-455に再録
- 伊藤俊夫・明石要一・星野敏男・松下俱子[2001]「なぜ研究紀要を発刊するのか」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』創刊号
- 小林成光[2014]「大学と情報公開」『桃山法学』第23号
- 佐和隆光[1982]『経済学とは何だろうか』 岩波書店
- 重松伸司[2007]「誰に向かって書くのか」『追手門学院大学国際教養学部紀要』創刊号
- 設楽成実・天野絵里子・神谷俊郎[2019]「紀要の電子ジャーナル出版における連携を目指して」『情報の科学と技術』第69巻第11号
- 竹内比呂也[2012]「大学紀要というメディア」『情報の科学と技術』第62巻第2号
- 橘木俊詔[2015]『経済学部タチバナキ教授が見た日本の大学教授と大学生』東洋経済新報社
- 村松友視[1980]『私、プロレスの味方です』 情報センター出版局
- 村松友視[1994]『合本 私、プロレスの味方です』 筑摩書房
- 山下洋輔[1981]「解説」 村松[1980]文庫版(角川書店)所収、村松[1994]pp.206-211に再録

ご清聴ありがとうございました。

全 但 バ ス 名 色 の り ば

このバス停内に單車
自転車等を置く事は
御遠慮下さい。
名色区長

この建物にポスター
広告等を取付ける事を
堅く禁止致します。
名色区長

Meiji 明治のスナック コーヒー